

Case 6

さつまいもと焼き芋でつなぐ世代間交流の取り組み

食育でつながる世代間交流プロジェクト 幼老複合施設を想定した通年型プログラムの検討

現代生活学部 食物学科

活動の概要

現代生活学部食物学科では、八王子市に建設予定の幼老複合施設をフィールドとして想定し、「幼児と高齢者が食育を通じてつながる交流プログラム」の可能性について検討しました。日本全体で少子高齢化や核家族化が進むなか、三世代同居世帯の減少により、祖父母と孫世代が日常的に関わる機会が少なくなっていることが指摘されています。その結果、高齢者と子どもが互いの世代を身近に感じにくくなり、世代間の心理的な距離や地域コミュニティのつながりの希薄化が課題となっています。

こうした状況の中で、幼児施設と高齢者施設を同一敷地・建物内に併設する「幼老複合施設」は、日常生活のなかで自然な世代間交流を生み出す場として注目されています。本研究では、八王子市の地域特性や生ごみ資源循環の取り組みも踏まえながら、幼老複合施設において「食べる・育てる・捨てる」をつなぐ食育活動を媒介に、幼児と高齢者が年間を通じて関わり合うプログラムの枠組みを検討しました。食育を通じて、子どもにとっては食や環境への関心を育み、高齢者にとっては経験や知恵を活かす役割を持てる場とすることを目指した取り組みです。

活動の内容

本研究では、まず世代間交流や幼老複合施設、食育に関する国内外の文献・調査報告を収集し、幼児と高齢者の交流がもたらす心理的・社会的な効果や、食育活動の教育的意義について整理しました。そのうえで、幼老複合施設における既存の交流事例や、安全管理に関する指針・マニュアルを精査し、活動内容や運営体制、安全面の課題を比較・分析しました。

こうした文献的検討と、八王子市が進める生ごみ資源循環の取り組みを踏まえ、食育活動として「生ごみ堆肥づくり」「さつまいもの栽培・観察・収穫」「焚き火による焼き芋づくり」を年間を通じて行う循環型プログラムの枠組みを検討しました。プログラムでは、生ごみを堆肥として活用し、土づくりから収穫・調理・試食までを一連の流れとして捉えることで、「食べ物の循環」や「資源を大切に作る心」を育むことを目指しています。

表1 幼老複合施設における通年型食育プログラムの年間スケジュール

時期	活動内容	目的
4~5月	生ゴミ堆肥作り・苗植え	循環理解・共同作業
6~8月	水やり・つる返し・観察記録	探究心育成
9~10月	草取り・収穫準備	役割意識・自然理解
10~11月	収穫・焼き芋づくり	達成感・食材への愛着

表2 幼児・高齢者・職員による役割分担のイメージ

工程	幼児	高齢者	職員
堆肥作り	混ぜる・観察	経験共有・助言	安全管理
植え付け	苗を運ぶ・植える	植え方指示	全体指導
生育観察	記録・気付き発表	声かけ	熱中症対策
収穫・調理	掘る・包む	つる抜き・説明	焚き火管理

活動の成果と学び

検討の結果、幼児と高齢者が一緒に取り組む通年型の食育プログラムとして、生ごみ堆肥化からさつまいもの栽培・収穫・焼き芋づくりへとつながる活動案を具体的に整理することができました。活動の年間スケジュールや、幼児・高齢者・職員それぞれの役割分担、安全管理のチェック項目などを表や図の形でまとめたことで、今後の実践に活用しやすい形にできた点が一つの成果です。また、食育と環境教育、世代間交流を組み合わせた「循環型の食育プログラム」として位置づけたことにより、八王子市の資源循環施策とも連動しうる地域性の高いモデルとして整理することができました。

一方で、本研究は施設が未完成であるため実際のプログラム実施には至っておらず、理論的検討と計画立案にとどまっている点に限界があります。特に、焚き火を伴う活動や屋外での栽培活動は、安全管理や職員の負担といった運営面の課題が想定され、今後の実践を通じて効果や継続可能性を検証していく必要があることも明らかになりました。大学コンソーシアム八王子学生発表会を通じて、計画段階での課題整理や改善点の洗い出しにつながったことも学生にとって大きな学びとなりました。



大学コンソーシアム八王子学生発表会で説明する学生の様子



食育を通じた世代間交流の取り組みを紹介した発表会場の様子

今後の展望

今後は、幼老複合施設の建設や運営体制の整備が進む段階に合わせて、今回検討したプログラム案を実際の現場で試行し、幼児・高齢者双方への効果や職員の負担感、安全管理上の課題などを検証していくことが求められます。特に、焚き火を含む活動については、共通の指針づくりや事前研修を通じて、安全で無理のない形で継続できる仕組みを整えることが重要です。

また、施設内の活動にとどまらず、家庭や地域の資源循環への意識づけにつなげる工夫や、保護者・地域住民を巻き込んだ食育イベントへの発展なども今後の検討課題です。大学としても、今回の検討で得られた知見をもとに、施設職員や地域関係者と協働しながら、幼老複合施設における「食育でつながる世代間交流」の実現に向けて、引き続き支援していきたいと考えています。

プロジェクト概要

- パートナー
有限会社多摩ヘルパーセンター
- 担当教員
現代生活学部 食物学科
准教授 岩本 直樹
助手 河合 彩夏
- 学生
現代生活学部 食物学科
4年生 1名
- 実施期間
令和7年4月～令和8年2月